

コニカミノルタへの声

以前に、コニカミノルタにかかわりを持っていただいた方々に、
コニカミノルタに対するご意見、ご感想をお寄せいただきました。



国連大学 副学長
東京大学名誉教授
安井 至 氏

私は、化学物質が環境に与える影響に関して研究しています。そうした観点から、日本企業の環境対応には非常に注目していました。

そのような折、コニカミノルタさんが自社の環境活動を地域の人々に理解していただく独自の方法として地域環境報告会を開始され、第1回の地域環境報告会が開かれたとき、私は基調講演をさせていただき、実際に地域環境報告会も後方から拝見しました。この報告会は、その後毎年続いており、私は第3回にも参加しています。

化学物質を多く扱うメーカーとして、地域に対してこのようなりスクコミュニケーション活動を実施したのは、私が知っている限り御社が最初で、その意義は極めて高いと評価しています。特に、



ジクロロメタンを大量に使用している事業所で、このような試みを実施したことは高く評価されると思います。この実績で地域住民の方との信頼は大きく深まったと考えられますが、次の段階のコミュニケーションをどう発展させていくのか、化学物質の対話でエクスプローラーとなり得た「志」を今後どのようにつなげていくのかに期待したいと思います。

御社は今後、グローバルにCSR活動を展開していかれるとのことですが、これまで培ってきた地域に向けたCSR活動の基本の上に、グローバル展開をしていただきたい。それは、「地域社会の人々にどう貢献するのか」「社員に対してどのような対応をしているのか」、最終的には「地球環境に対して企業はどのような責任を持つか」を具体化するのがCSR活動だと考えるからです。

CSRを有効な経営のツールとして企業活動を展開していくことは大変なことだと思いますが、今後も、より広い視野から高い目標に挑戦して欲しいと思います。



大和総研 経営戦略研究所
主任研究員
河口 真理子 氏

10年前、当時まだアナリストとして、コニカさんも、ミノルタさんも担当していた私の印象は偶然にも、両社に対してまったく同じものでした。それは、「まじめで、誠実」。お会いする社員の皆さんはいつも穏やかで「働きやすそうな職場」と感じました。しかし、正直・誠実ということは、巧く立ち回ることができないということで、アピール力という点では、何か物足りなさを感じます。たとえば、技術的に良い製品を持っているわけですから、「ここがこんなに優れている」ということを、もっと強烈にアピールすべきではないでしょうか。これはCSRにおいても言えることです。御社は

「グローバルに通用するCSRを経営に取り入れる」と掲げていらっしゃると思いますが、御社のどこを見てほしいのか、もっと「強く」CSRレポートの中で語ることが必要だと思います。

一方、このCSRレポートでは章立てを行動憲章の順番にしていることや、中国での工場建設など興味深い話を中心に構成していることに、創意工夫の跡が感じられます。特に、トピックとして中国での生産拠点の立ち上げを取り上げたことは、グローバル戦略の好事例と評価できます。この話の中で印象的だったのは、後段にある「人」を重要な財産と考え、従業員の90%を地元採用し、地

域の雇用創出に寄与した点や、労働組合が早期に設立されたことなどです。ただし、ここが御社のアピール力が物足りない点なのですが、工場の早期立ち上げの話よりも、現地の従業員や労働組合をメインにされたほうが、御社のCSR的意味づけがはっきりするのではないのでしょうか。

外部の視線で社内を見渡し、積極的にアピールする点はアピールしつつ、また問題視されるネガティブな情報も社風どおり誠実に開示するという情報発信を心がけると、御社のファンづくりにもっと役立つと思います。



【遠藤氏】

私はマンモグラフィ（乳房撮影）を使用した乳ガンの診断に長年携わってきました。医師がマンモグラムから情報を的確に読み取るためには、画像の濃度階調が極めて重要です。約8年前、教育活動用マンモグラムの複写法を模索していた私たちに、当時販売されていたフィルムの性能を大幅に上回る濃度を実現したデジタル複写法を提案していただきました。その後、たびたび行ったフィルムの複写作業にあたり、徹夜業務にもご協力いた



【森田氏】

米国、欧州ではマンモグラフィによる乳ガンの検診率が80%を超えていますが、日本ではまだ数%にとどまっています。社会習慣や女性自身の検診の必要性に対する認識の低さなどいろいろな理由が考えられます。コニカミノルタさんには、私たちが取り組んでいる乳ガンの早期発見・診断・治

だきましたが、それはマンモグラフィによる乳ガン検診が将来果たすであろう「乳ガンの早期発見」がもつ社会的意義を受け止めてくださったものと、心から感謝しております。

その後、研究所を挙げて画期的なデジタルマンモグラフィの開発や、さらに高濃度フィルムの開発に取り組み、それを実現されてきました。それは会社全体が、乳ガンの早期発見のために「自分たちは何をすればよいのか」を追求した結果である、と思います。

メーカーは、ともすれば新製品を売りたいがために便利さばかりを強調し、本質を見失うことがありがちです。御社はイメージング技術に取り組まれている企業ですから、今後も人々の命を助けようとする私たち医療関係者が「いま、何を見ているか」「次に何を見たいか」を理解し、これを援助してくださる企業であり続けることを要望いたします。

療を進める「ピンクリボン運動」を支援していただいております。

さらに、御社の女性社員の方に向けて、マンモグラフィの検診について啓蒙活動を行い、もっと積極的に受診する環境づくりを進めていただければと思います。そうした環境や意識が広がれば、日本全体の検診率も上がっていくと思います。



国立病院機構 名古屋医療センター
放射線科部長
NPO法人 マンモグラフィ検診精度管理中央委員会 教育・研修委員会委員長
遠藤 登喜子 氏



中日新聞社健康保険組合
中日病院 乳腺科 医師
森田 孝子 氏